

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

* 再び OPEN GATE を逃す *

～ イタリアげんぱつ紀行その 8 ～

二宮 大輔

やってしまった。イタリアにあった四つの原子力発電所の内部が報道関係者に公開される OPEN GATE というイベントを、去年に続いて今年も逃してしまった。というか、2025 年は 7 月現在、そのようなイベントが開催される予定はない。近年、毎年 5 月ごろに開催されていたので、今年もそうだと信じて疑わず、3 月からこまめにインターネットをチェックしていたが、待てど暮らせど開催のお知らせがリリースされない。5 月を当て込んですでに飛行機を予約しており、ついには肝心の OPEN GATE 開催が発表されないままイタリアに行く日を迎えてしまった。さすがは適当なイタリア！ではなく、ここは見通しが甘かった自分を恨むべきだろう。なんと愚かな自分！そうは言ってもしかたがないので、イタリアに来たからには何か代わりになる題材をさがさなければならない。OPEN GATE はなくとも、やはり自分が唯一行けていないカンパーニャ州のガリリアーノ原発に行くか？でも中に入れてもらえないのなら、もはや行く意味はない気がする。そして何より、四つの原発の解体作業を進め放射性廃棄物の管理を担当する国有企業 SOGIN の生の声を聞けないのなら行く意味がない気がする。

5 月上旬ローマに到着して、そんなことを常宿の家主フェデリコに話していたら、L'Avvocato dell'atomo(原子の弁護士)なる YouTuber の存在を教えてくれた。正しくは YouTube チャンネル、

そしてプロジェクト名かもしれない。コンセプトは、トリノ大学で物理学の修士課程を修了したルカ・ロマーノと、各々科学分野を専門とする仲間たちが、原発に関する流言飛語を取り払い、その安全性を科学的に立証し、イタリアで原発を推進していくというものだ。扇動的な感情論で原発反対を唱える人が多いなか、このチャンネルでは科学的データに基づいて解説されており、フェデリコはいたく気に入っている。コロナ期に活動を開始し、現在のチャンネル登録者数は約 4 万 7000 人。2022 年にはルカ・ロマーノ名義で書籍も刊行している。

個人的には、これまでイタリアの原発について調べてきて、簡単に原発推進に賛同する気にはなれないし、対立意見が非生産的な悪口の言い合いに陥りがちな SNS というメディアでそれを展開するのも好きではない。ただ、動画を継続して投稿しているところ、頻繁に専門家をゲストに呼んでトークするところなど、その情熱は評価したい。そして何より私の気を引いたのは、ちょうどこのチャンネルのことを教えてもらった 5 月上旬のタイミングで、L'Avvocato dell'Atomo が、SOGIN のジャン・ルカ・アルティツツウにインタビューしている動画が公開されたことだった。アルティツツウは 2023 年から SOGIN 最高経営責任者を務めており、ぜひ会って話してみたい人物の一人だった。そんな彼に原発推進派 YouTuber が会いに行っている！さらに L'Avvocato dell'atomo の動画

一覧をチェックしてみると、私が見学に行ったブラジモネの研究施設にも行っているではないか！ スタンスは違えど、そして私のほうが圧倒的に専門知識を欠いているが、興味の対象は似ていると感じた。

では L'Avvocato dell'atomo はアルティツツウにどのようなインタビューを行ったのだろうか。まずインタビューの数日前、5 月 6 日に原子力エネルギーに関する講演会が開催された。そこに寄せられたビデオメッセージで、イタリアの環境・エネルギー安全保障大臣ジルベルト・ピケット・フラティンが、放射性廃棄物のために「イタリアには一つの Deposito Nazionale (国立保管所)ではなく、複数の貯蔵地が必要となる」と発言した。



【安全保障大臣ジルベルト・ピケット・フラティン】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Gilberto_Pichetto_Fratin

Fratin

これはどういうことか、前回の繰り返しになる部分もあるが、説明したい。イタリアは現在、工業・医療で生み出される低レベル放射性廃棄物の最終処分場かつ、原子力発電所で生み出される高レベル放射性廃棄物の中間貯蔵地として利用す

る Deposito Nazionale を一つ建設するための場所を選定している途中である。さまざまな条件を考慮して 51 の候補地をリストアップしたが、どこもそのような貯蔵地を望んでおらず、選定は遅々として進んでいない。そんな状況下で、担当の大臣であるピケット・フラティンが上記の発言をしたのだ。喫緊の課題を放り出して方向転換するかのようなこの発言に、原発推進・反対に関わらず、多くの人が眉をひそめた。L'Avvocato dell'Atomo もその一人だ。そこで、インタビューを通して、大臣の発言について、環境・エネルギー安全保障省とタッグを組んで廃棄物処理の問題に取り組む SOGIN 代表者からの見解を求めたのだ。

アルティツツウの答えはこうだ。まず、大臣が話していたのは、低レベル放射性廃棄物についてであり、合理的な廃棄物処理を行っていくための一案である。以前から、51 の候補地から Deposito Nazionale を決める案と並行して別案を考えてほしいと大臣から要請されていた。ビデオメッセージでは誤解が生じたが、以前から議論していた Deposito Nazionale を選定するという案が消滅したわけではない。

これに対して L'Avvocato dell'atomo は、Deposito Nazionale の建設候補地を決定させると、少なくない国民から批判の声が上がるのを恐れて、大臣がことを荒げることなく 2027 年の選挙を迎えるために時間稼ぎをしているのではないかとインタビュー後の動画で指摘している。私個人としては、インタビューでアルティツツウがいかに大臣の発言を取り繕っているように見えた。ゆえに、当然と言えば当然だが、SOGIN はあくまで国の機関の一部でしかないことがはっきりと認識できた。そして原子力の研究・開発施設を運営する ENEA と既存の原発の解体を進める SOGIN は相反する方向に動いているようで、どちらも大元にはイタリア政府がいる。同じ政府がいつぼうで原発解体を進め、いつぼうで原発を推進しているのだ。この体制が今後も続くとなると、どこかで異常をきたすのではないだろうか。

以上が、5 月にイタリアに滞在したときの所感だったのだが、日本に帰国後、事態が動いた。6 月 25 日、下院の環境委員会の答弁で、件の大臣ピケット・フラティンが 2029 年までに新しい Deposito

Nazionale 建設に着手、2039 年から実用化すると宣言したのだ。どの自治体からも建設地の立候補がない場合は、共和国大統領令に基づいて決定することだ。つまり国がどこに建設するかを決めるのだ。国内の低レベル放射性廃棄物の増加に加え、現在一時的に国外に貯蔵している高レベル放射性廃棄物も近い将来イタリア内に戻ってくるという状況を踏まえ、いよいよ問題が深刻化しているのだろう。選挙まで時間稼ぎをして、今は貯蔵地建設に最終決定を下さないのではないかという L'Avvocato dell'atomo の予想に反した決断となった。

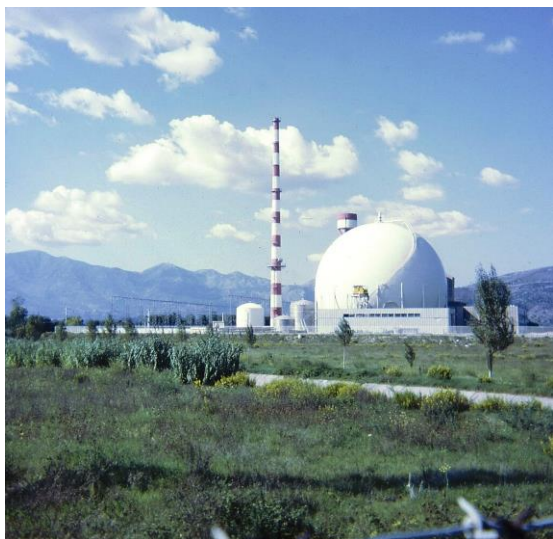
では、今後 Deposito Nazionale の建設地として立候補する自治体は現れるのか。実は 2023 年 12 月に 51 の候補地リストが発表された際、同時にリスト外でもいいから立候補する自治体を募っていた。そこで一つだけ立候補した自治体があった。イタリアの四つの原発の一つが稼働していたピエモンテ州の小村トリノだ。私も 2023 年に訪問したことがある、Torino ではなく Trino という田舎町だ(当誌 2023 年 11 月号参照)。2024 年 3 月の期限を前に、同年 1 月にトリノが立候補を正式に表明。環境団体の反対もさることながら、主に周囲の市町村から異議を唱える声が多数あり、期限直前になって立候補を取りやめた。現在の日本でもそうだが、立候補もデリケートな問題でなかなか厳しい。ということは、イタリアでは 2029 年を前に大統領令が発令する算段が大きいのだろう。ますます今後の動きから目が離せない。

などと言いつつ、ここで私が勝手に始めた連載「イタリアげんぱつ紀行」を勝手に最終回にしたいと思う。今回わかったように、イタリアの原発政策もまだまだ不安定で先行きが読みにくい。そしてイタリアだけでなく、世界で、原発の研究と運用とそれにまつわる諸問題が続いていく。今回でいったん連載を終えるが、原発に関する取材や思索を今後も続けることをここに誓いたい。

最後に OPEN GATE に参加してガリリアーノ原発内部を見学しようと思っていたのだが、私の不手際でそのミッションを果たせなかった。将来、もし OPEN GATE に行くことができれば、この連載を一冊の書籍にまとめて出版する際に、改めて

ルポを書き下ろしたいと思っている。その予定はまったくないのだが。

そしてこの連載には裏テーマとして、記事のなかにできるだけ映画や文学の引用を入れ込むというものがあつた。それは L'Avvocato dell'atomo とは真逆の、先述のわが友フェデリコが嫌う「科学的データに基づかない思考」で、自分なりに原発という理系分野に挑みたいという壮大な野望があつたからだ。結果は伴わなかったかもしれないが、今後も同様のスタイルを貫徹していくという意思もここに表明しておきたい。ご愛読ありがとうございました。



【ガリリアーノ原発】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Centrale_nucleare_del_Garigliano

(翻訳家、元当館受講生)

* ヨーロッパという夢、 そしてその未来 *

深草 真由子

ロベルト・ベニーニの新しい本が出た。アカデミー国際長編映画賞(外国語映画賞)を受賞した『ライフ・イズ・ビューティフル』の監督、主演として知られる彼だが、イタリア国内ではコメディアンとしても活躍していて、そのような時は折テレビでも見ることができる。今回出た本も、この春に放映された番組の内容をもとにしたものである。



【ロベルト・ベニーニ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Roberto_Benigni

イタリアではどうしたわけか、見る価値のありそうなテレビ番組はいつも遅くに始まり、遅くまで続く。このベニーニの独演もそうで、眠気にかけて最後まで見るができなかった。だから書籍化されたのが嬉しく、すぐ書店にむかった。

表紙にはテレビ番組のタイトルとおなじ『夢』と

あり、そこに副題『ヨーロッパは目覚めた！』がついている。これはマメーリの賛歌(イタリア国歌)の冒頭「イタリアの兄弟たちよ、イタリアは目覚めた」から来ているのだろう。リソルジメントの英雄たちがイタリア統一を志して立ちあがったように、21世紀のわれわれはヨーロッパの統合にむけて力をあわせようじゃないか。そんなメッセージがここに込められているのだろうか。

ヨーロッパの統合といったって、もうすでにEU(欧州連合)があるだろうと思われるかもしれない。しかし、それはまだ完成してはいない、というのがベニーニの考えなのだ。

ベニーニは政治の専門家ではなく、当然この本も専門書ではないので、もの足りないと思う人もいるだろう。だが、ニュースを見聞きしても「わかったような、わからないような」でいつも済ませてしまっていた私には、彼の解説はとてもシンプルでわかりやすく、知識を整理するにはちょうどよかった。こうしてテレビで放映され、本が出るくらいなのだから、多くのイタリア人にとっても同じことなのではないか。やっぱりEUはまだまだ遠い存在なのだ。

というわけでここでは、EUをすこし身近に感じさせてくれる、ロベルト・ベニーニの『夢』を紹介したい。ただ、この本の面白さはいわずもがな、イタリア随一の表現者であるベニーニの語りにあるので、それが気になる方はぜひ原書を手にとるか、あるいは舞台でのパフォーマンスをご覧いただきたい。

まず基本的なことになるが、現在27の加盟国からなるEUには、主要機関として次の4つがあるそうだ。

- ①〈欧州議会〉立法機関。その議員は約4億人の有権者によって選挙で選ばれる。議事堂はストラスブールとブリュッセルにある。
- ②〈欧州委員会〉行政機関。その委員は加盟国から1名ずつ、各国の政府によって選出される。ブリュッセルを拠点にする。
- ③〈欧州理事会〉加盟国の首脳からなる。
- ④〈欧州連合理事会〉加盟国の閣僚からなる。

ヨーロッパ市民の意志のあらわれである①では、議員たちは国ごとではなく、主義主張でまとまってグループをつくる。また②のメンバーは、出身国の政府から独立した立場をとるよう求められる。そうしたあり方から、①と②ではヨーロッパ全体の利益がまず第一に考えられることになっている。

一方、③と④は国の代表の集まりであるがため、どうしてもそれぞれの国の立場や利益が優先される。全会一致を原則としているため、出てくるものは妥協の産物であることが多い。もしどこか一国でも断固「ノー」だと言えば、話はそれ以上先に進まない。にもかかわらず、外交などの重要な問題について政策を決めることができるのは③と④だけということになっていて、①と②は提案しかできない。

一部の国の「ノー」によってヨーロッパ全体がお手上げ状態になった例の典型が、難民への対応である。すべての加盟国が協力しあい、それぞれがキャパに応じた数の難民を受け入れようという①と②の提案を、いくつかの国の政府が却下したということがあった。

こんなことから「ああ、やっぱりヨーロッパはダメだね」という声が広まる。そして EU 懐疑派が支持を伸ばす。しかし、EU が機能不全に陥る原因は一体どこにあるのだろうか？①②か？それとも③④か？そこをよく見ようよ、とベニーニは訴えている。

加盟国のもつ(場合によっては「エゴ」ともとられかねない)主権をもうすこし制限し、EU の連邦としての性格をもっと強化していかなければならない、というのがベニーニの考えである。世界における存在感をこれからもキープし、繁栄しつづけるためには、ヨーロッパ諸国が今以上に結束するほかに道はない。異なる歴史、異なる言語、異なる文化をもつヨーロッパ人がともに生き、民主主義を守っていくことできたら、それはユートピアだと思われていた社会の実現であり、世界に希望を与えることができる、というのである。

マグナ・カルタって覚えてる？イギリスが何世紀も昔、はじめの一步を踏み出したよね。議會を考案し、人びとに「あなた方は自由だ」と言ったんだ。二歩目はフランスで、革命を起こして「あなた方は国の主権を持っている」と言った。そして今、僕らヨーロッパ人がみんな一つにまとまって、最後の一步をなしとげよう。そして世界中の人にむかって言おうじゃないか、「あなた方は兄弟なんだ！」と。(pp.137-138)

こんな夢のような話が説得力をもつのは、『夢』の前半部分でヨーロッパ統合の歴史がベニーニによって熱く語られているからである。しかもその歴史のもっとも印象的なページはイタリアで書か

れたのだそうだ。

第二次世界大戦中のことである。ヴェントターネというティレニア海に浮かぶ小さな島に、アルティエーロ・スピネッリ、エルネスト・ロッシ、エウジェニオ・コロルニの3人がいた。ファシズム政権に異を唱えたために、政治犯としてこの島に流されていたのである。



【ヨーロッパの日】

出典: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%83%AD%E3%83%83%E3%83%91%E3%81%AE%E6%97%A5>

ももとは教師で、授業中に逮捕されたというロッシのもとに、恩師のルイージ・エイナウディ(戦後、イタリアの大統領になる人物)から、イギリスで出版された何冊かの本が届けられた。3人はそれを読みながら、「戦争の治療法」なるものが存在することを知る。感染症にペニシリンが効くように、戦争にはこれが効き、おかげでアメリカでは戦争がなくなっただけ。

それが 1787 年の合衆国憲法である。すこし前までイギリスの植民地だった 13 の州が、それぞれ独立を保ちながら、より強くあるために結びつく、連邦という国家の形を編み出した。たしかにアメリ

力ではあれだけの数の州が集まっているのに、独立以来、南北戦争をのぞき、たがいに争いあうということがないのだから、戦争を防ぐための方策として効果があるだろう。



【アルティエロ・スピネリ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Altiero_Spinelli

ヨーロッパでもこの「治療法」を取り入れるために、上で名をあげた反ファシスト3名が1941年に発表したのが『ヴェントテーネ宣言』である。ナショナリズムを克服し、民主主義的でリベラルな統一ヨーロッパをつくろうというものだ。ヨーロッパ連邦というアイデア自体はそれまでにもあったものの、それを具体的なプロジェクトとして示したという点で、歴史上初の文書であった。ファシスト警察の検閲を逃れるため、『宣言』はタバコの巻紙に記され、ローストチキンの内部に隠されて、ロッシとコロールニの妻によって島から本土へと運ばれた。そしてこれがじわりじわりと広まって、ヨーロッパは統合へと動き出したのである。

ヨーロッパ史において、僕の世代は戦争を体験していない初めての世代なんだ。僕だけでなく、第二、第三、もしかしたら第四世代にあたる君たちみんなも、誰も戦争を知らない。これはとてつもない、前代未聞の、奇跡みたいなことなんだ！(p.24)

EU、それは、20世紀のヨーロッパで犯され

た過ちと恐れおののくべき出来事の反省から生まれ、英雄——そう、まさに英雄、理性の英雄たち——によって考案されたプロジェクトであり、……僕らヨーロッパ人に、トロイア戦争以来の歴史において、もっとも長くつづく平和の時代を生きることを可能にしてくれている一つの実験なんだ。(p.34)

ベニーニにとって統合ヨーロッパは、戦争の絶えないこの世界における希望であり、努力次第で現実になりうる唯一の夢なのである。

Roberto Benigni e Michele Ballerin con Stefano Andreoli, *Il sogno. L'Europa s'è desta!*, Einaudi, 2025.

(元当館スタッフ)

<オンラインレッスン随時受け付けております>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです！

- ・関西圏以外や海外にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
- ・外出を控えられている方

受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>